

Bluff Archives News Letter

第5号 2025年8月

発行 NPO法人横浜山手アーカイブス

戦後の横浜～米軍の進駐

8月で戦後80年を迎える。80年前の横浜はどうだったのだろうか？戦後、横浜は、沖縄を除く日本全土の占領を担当した米第八軍司令部が置かれたこともあり、米軍基地の街となった。8月30日、ダグラス・マッカーサー連合軍最高司令官が厚木飛行場に到着、アイケルバーガー米第八軍司令官らと共にその日のうちに横浜へ移動し、当面の宿舎となるホテル・ニューグランドに入る。同日米海軍・海兵隊も横須賀への上陸を開始し、9月2日戦艦ミズーリ上で降伏調印式が行われた後は、横浜からの上陸が始まった。その後、総司令部は東京日比谷の第一生命ビルへ移るが、横浜には、米第八軍の司令部（横浜税関ビル）が置かれたため、多くの部隊と兵員が駐屯することになった。



アメリカンハイスクール 1947年4月22日
米国国立公文書館所蔵 / 横浜市史資料室

占領下の街

米軍の上陸・進駐と同時にほとんどの港湾施設が接収され、焼け残った中心部の建物には主要な部隊の司令部やオフィスが置かれ、士官・軍属の宿舎となった。宿舎周辺には米軍将兵のための様々な施設が設けられた。これらの土地を接収する際は、5月29日の横浜大空襲の後、焼け跡にバラックを建てて暮らしていた日本人は強制的に立ち退かされ、米軍が重機で整地し、一般兵士向けのカマボコ兵舎や独身将校向けの三角屋根の兵舎が建設された。横浜公園も接収され、球場はルー・ゲーリックスタジアムと名前を変え、公園内にあった武道館はゴールデンドラゴンクラブという兵員クラブとなり、野外劇場やテニスコートも米軍専用となった。山下公園には将校用家族住宅が建設された。[1]

山手から根岸地区の接収

山手一帯は空襲による被害が少なく戦前に建てられた高級洋風住宅が多く残っていた。『横浜の空襲と戦災 5』に掲載された「進駐軍接収住宅調書」によれば、昭和21年5月15日現在、接収された住宅106戸のうち中区が94戸を占める。次のような記載がある。「旭台53（シマイヤ）マッカーサー用、根岸滝ノ上137（平田穂作）参謀長サーランド、山手町244（カールフライヤ）高級将官4名、山手町245（W・エグチ宅）同右官5名、山手町72（A 杉浦宅）フリン将軍用、山手町72（B 中沢宅）/山手町72（C 森宅）/山手町73 赤十字看護婦用」などと続く。マッカーサーは当初ホテル・ニューグランドに入るが、ホテルに留まったのは3日間で、調印式の後、17日に東京のアメリカ大使館公邸に移るまで旭台のC・マイヤー邸を宿舎とした。参謀長リチャード・サザーランドには滝ノ上の平田穂作宅、高級将官9名には山手

町244番ドイツ人のカール・クライヤー宅とその隣の245番W・エグチ宅が調達され、周辺にある他の邸宅も士官等の宿舎に当てられた。[3] 因みに山手町72は、現ベリック・ホールのある場所である。住宅以外では横浜女子商業学校（山手町27）はアメリカンハイスクールに、山手公園のテニスコートや元町公園のプールも接収されて米軍専用となった。またブラッフ住宅地区（山手町・山元町他）には米軍人・軍属用の家族住宅240戸が建設された。[4]

米軍将兵は、長期の滞在が想定され、一定の要件を満たせば、家族を呼び寄せることもできたため大量の住宅が必要となり、山手だけでは足りず、根岸と本牧にも焼け跡に新たに家族住宅1300余戸が建設された。根岸住宅地区はエリアX、本牧・小港地区はエリア1（海側）、エリア2（内陸側）と呼ばれ、本牧住宅地区の中央にはPXやガソリンスタンド、クリーニング工場、ボーリング場、映画館が設けられ、テニスコート、グラウンドなどが整備された。本牧小学校は接収されてアメリカンスクールとなり、新山下町にはコーラの工場もできた[1]。山手、根岸、本牧の住宅地区には、米軍将兵と家族の生活に必要なあらゆる施設が完備されたアメリカの街が再現され、街にはアメリカ文化があふれた。

接収された多くの土地や建物は、1952（昭和27）年の対日講和条約発効後、段階的に解除されたが、本牧のエリア1、2などは解除が長引き、1982年まで続いた。残るエリアXも返還に向けた原状回復作業のための共同使用が合意された。

（N）

<引用・参考資料>

- 『米軍基地と神奈川』栗田尚弥編著 有隣新書 2011年
- 『横浜の空襲と戦災 5 接収・復興編』横浜の空襲を記録する会 1977年
- 『占領の傷跡 第二次大戦と横浜』服部一馬、齊藤秀夫著 有隣新書 1983年
- 「横浜市における接収解除の経緯と現況」横浜市総務局渉外課 1969年
- 「横浜市と米軍基地」横浜市都市整備局基地対策課 2025年